

Long-Term Trends in The 5-year Risk of Recurrent Stroke over A Half Century in A Japanese Community: The Hisayama Study

中西, 泰之

<https://hdl.handle.net/2324/4795538>

出版情報 : 九州大学, 2022, 博士 (医学), 課程博士
バージョン :

権利関係 : (c)2022 Japan Atherosclerosis Society. This article is distributed under the terms
of the latest version of CC BY-NC-SA defined by the Creative Commons Attribution License.

(別紙様式2)

| | |
|--------|---|
| 氏名 | 中西 泰之 |
| 論文名 | Long-Term Trends in The 5-year Risk of Recurrent Stroke over A Half Century in A Japanese Community: The Hisayama Study |
| 論文調査委員 | 主査 九州大学 教授 馬場園 明 副査 九州大学 教授 吉本 幸司 副査 九州大学 教授 筒井 裕之 |

論文審査の結果の要旨

申請者らは、日本の地域住民を対象とした半世紀以上にわたる前向きコホート研究のデータを用いて脳卒中再発リスクの時代的推移を検討した。1961年、1974年、1988年、2002年に設定した4つのコホートを用いた。脳卒中再発リスクを検討するため、各コホートをそれぞれ10年間追跡し、その期間に初発の脳卒中を発症した154名(第1サブコホート:1961-1971年)、144名(第2サブコホート:1974-1984年)、172名(第3サブコホート1988-1998年)、146名(第4サブコホート:2002-2012年)を本研究の対象として、各サブコホートの対象者を脳卒中初発日から5年間追跡した。全脳卒中初発後5年間の再発リスクについて、カプラン-マイヤー法および性年齢調整したコックス比例ハザードモデルを用いてサブコホート間で比較した。その結果、全脳卒中および虚血性脳卒中初発後の再発リスクは第1サブコホートから第3サブコホートにかけて有意に低下したが、第3サブコホートから第4サブコホートにかけては明らかな低下は認めなかった。出血性脳卒中初発後の再発リスクは主に第1サブコホートから第2サブコホートにかけて低下し、第2サブコホートから第4サブコホートにかけては明らかな低下は認めなかった。これらの傾向は性年齢調整後もほぼ同様であった。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、研究結果などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。なお本論文は共著者多数であるが、予備調査の結果、申請者が主導的役割を果たしていることを確認した。よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定し、博士(医学)の学位に値すると認める。